



◀ contents ▶
目次

○巻頭言

かけがえのない二人を奪った
震災 20 年 / 山中茂樹 …………… 1

○報告

東北学院大学シンポジウム「震災と宗教
一悼みと向き合う社会へ」
/ 福田 雄 …………… 2
震災研究会

小さく穿つ「事起こしのまちづくり」
から入る地域復興への挑戦 / 岡田憲夫
日本の災害ガバナンスにおける逆イ
メージ (金暎根)
〈地域〉の内部で〈トランス地域〉を試
考する (全成坤) / 山 泰幸 …………… 3

○2015 年復興・減災フォーラム予告

…………… 4-5

○報告

第 5 回国際総合防災学会 (IDRiM2014)
が開催されました / 松田曜子 …… 6

○観感学楽

震災 20 年を取材して / 森本尚樹
阪神・淡路大震災 20 年—時間の壁と
向き合って / 矢倉崇史 …………… 7

○ともに

日本を救う「青島化現象」?
日本災害復興学会 会員募集中!! … 8

かけがえのない二人を奪った 震災 20 年

災害復興制度研究所教授
山中茂樹



阪神・淡路大震災 20 年を前に私たちの盟友、黒田裕子さんが亡くなった。9月24日のことだ。阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長。「魔除けの黒田さん」と被災者から頼られ、彼女の再訪を心待ちにしている被災地も少なくなかった。1941 年生まれ。震災後、宝塚市立病院副総婦長を辞職、「看護婦 (師) にはいつでも戻れるが、今しかできないことを」とボランティアに専念し、19 年間、一日として休まなかった。「やりたいことと家庭は両立できないから」と生涯、独り身でもあった。

「黒田さんが末期がん」。それこそ魂消るような知らせを聞いたのは 9 月に入ってから。「山中さんに会いたがっている」と聞いて、西宮市内の病院に何の心構えもなく飛んでいった。「ごめんなさい。授業にはもう行けない」。病床から私の手をとって、本当にすまなさそうにわびられた。災害復興制度研究所は、阪神・淡路大震災 20 年企画授業として「震災パネ」をテーマに秋学期、震災にくじけず新たな人生を歩んだ人々をゲストに一連の講座を構えている。黒田さんは 7 回目、11 月 14 日の講師をお願いしていた。一瞬、だれに代役を頼もうかという思いがよぎったが、それより黒田さんの弱りように声を失った。

日本の各地で災害が起き、われわれがどうやって被災地に入ろうか、相談しているとき、ふとテレビを見ると、黒田さんが避難所に座ってお年寄りの手をとっている姿がいつもあった。都心の待ち合わせでは、たいてい迷子になるのに、被災地ではコンパスで測ったように、ぴったりと激甚地に入っている。携帯電話がつながるのは、いつも午前 1 時過ぎ。そんな不死身とも思えた黒田さんが、やせ細り病室の天井をにらんで、「死ぬのはこわくないけど、時間が欲しい。もう時間がない。伝えたいことがまだまだあるのに。山中さん、若い人たちは、ただガレキを片付けるだけではだめ。「ガレキの向こう」に被災した人がいることをもっと理解しなければ」と声を絞りだして話されるのに言葉もなかった。

「防災は実学でなければならない」。このとき、6 年前に亡くなった東京大学の廣井脩先生のことを思い出していた。廣井先生の起こした日本災害情報学会の大会に参加していたところ、携帯電話が鳴り、先生から研究発表の内容を尋ねられた。「ツールの特性など技術面に偏った発表が多いような気がします」と答えると、当時、がんが悪化し、入院中だったが、「だろう。人間の登場しない情報はだめなんだよ」と強く言われたことが印象的だった。

現場を大切に、人に寄り添う。研究者と実務家という活躍する世界の違いはあったが、お二人は敬愛する間柄だった。病室を去るとき、「黒田さん、向こうで大好きな廣井先生が待っているよ。これからは時間を気にせず、対談ができるね」と心の中で、話しかけた。

震災 20 年は、私から大切な二人を奪う残酷な年月でもあった。

岡田所長、福田RAら東北学院大学での震災研究会とシンポジウムに参加

韓国高麗大学校から金、全氏も参加、交流深める

関西学院大学災害復興制度研究所は、7月4、5両日、連携協定を結んでいる東北学院大学で開催された同大学地域共生推進機構主催の「震災研究会」と大学主催のシンポジウム「震災と宗教——悼みと向き合える社会へ」に岡田憲夫・所長、山中茂樹・主任研究員、松田曜子・研究所准教授、山泰幸・人間福祉学部教授、福田雄・研究所リサーチアシスタント（RA）が参加した。岡田所長は、震災研究会で鳥取県智頭町での地域復興にかかわる事例を発表、福田RAはシンポジウムにパネリストとして参加、南三陸町における慰霊・追悼行事の事例を通じ、「3.11」と向き合う社会的な空間づくりについて報告した。また、震災研究会には研究所が国際連携を進めている韓国・高麗大学校日本研究センターの金暎根、全成坤両氏も参加、交流を深めた。（山中茂樹）

シンポジウム 2014年7月5日（土）於：東北学院大学土樋キャンパス

「震災と宗教——悼みと向き合える社会へ」



福田雄
(災害復興制度研究所 RA)

本年1月に当研究所と連携協定を結んだ東北学院大学にて「震災と宗教」をテーマとするシンポジウム（東北学院大学・河北新報社共催）が開催された。第一部では、宗教学者の山折哲雄氏および宗教人類学者の山形孝夫氏がそれぞれ基調講演を行った。第二部では、若林一美氏（立教女学院短期大学長）、菅原裕典氏（株式会社清月記代表取締役社長）および佐々木俊三氏（東北学院大学副学長、教養学部教授）とともに、本研究所RAである私もパネリストとして議論に加わせて頂いた。以下に議論の骨子を簡潔に振り返ってみたい。

「セラピストと教師の違い」と題された山折氏の基調講演では、臨床心理学と宗教の間にある共通性と差異が主題としてとりあげられた。山折氏はまず、河合隼雄と中井久夫という二人の精神科医の心理学的的方法論を紹介したうえで、浄土真宗僧侶の死刑囚教誨の取り組みに言及された。以上の対比的考察からは、心理学的言語や宗教的教義など言葉の領域からはみ出る諸々の技法が、苦しみからの解放に重要な役割を果たすことが示唆された。

続いて山形氏の講演では、「震災から見えてきたこと——想定外を想定する力」と題し、様々な文化における「泣き／哭き」の事例を取りあげることで、「想定外」の出来事と向き合うための「悲しみの知」が論じられた。エチオピアや中世キリスト教における泣くという行為は、それぞれの文化に埋めこまれた社会的な営みとして理解された。一方日本の文学作品や能などには、声を出さず涙も流さない、泣き／哭きの伝統が見られるという。これらを踏まえたうえで、最後に日本特有の悲しみと鎮魂の技法が紹介された。

第二部「悲しみの技術」を巡って」では、まず本シンポジウムのコーディネーターでもある佐々木氏から、「悲しみの技術」というテーマについて説明がなされた。この言葉を用いた背景として佐々木氏は、現代社会が悲しみ・苦しみ・痛みなどを排除しすぎるあまり、これらに向き合う様々な技法を失いつつあるという現状認識を示された。

続いて宮城県内で葬儀会社を経営する菅原氏から、東日本大

震災後の遺体や遺族への対応の経験が分かち合われた。菅原氏は、限られた時間のなかで入手可能な諸々の資源を総動員しながら、遺族に寄り添い、弔いの手助けに奔走されたという。想定外の状況に対応せざるをえなかった社員の精神的負担を懸念しつつも、できるだけ遺族の方々の思いを形にするよう心がけたという。

若林氏からは、氏自身が世話人を務める「小さな風の会」（子を亡くした父母の会）の経験が語られた。他者と共有しえない悲しみに暮れ、しばしば孤立しがちである遺族が、ともに語り、聞き、黙する（祈る）場を確保するよう氏は心掛けてきたという。安心して感情を吐露できる場があることで、悲しみを背負いながらも生きていける。命、そして死と向き合うこうした場の重要性を強調された。

3人目のパネリストとして私は、南三陸町における慰霊・追悼行事を紹介させて頂いた。仙台出身のアートディレクターが中心となった「南三陸の海に思いを届けよう」という慰霊行事では、海・震災・死者と向き合う場が月命日ごとに設けられていた。ただ海を眺めるというこの催しのなかで初めて、震災以降「おっかない場所」となった海と向き合うことができた人々がいた。それは個人的であると同時に、町民がともに「3.11」と向き合う社会的な空間を作り出していたのである。

最後に講演者とパネリストが一人ずつ、死と向き合う現代的な技法の望ましいあり方について論じ、シンポジウムは閉じられた。全体的には、死や苦しみをめぐる知や思想というよりは、儀礼や文化的技法など実践的観点からの考察に大半の時間が割かれていたように思う。震災から3年が過ぎた今日、苦しみや悲しみに寄り添う様々な領域において、本シンポジウムで提起された問題が引き受けられていくことになる。（報告：福田雄）



岡田憲夫
(災害復興制度研究所 所長)

2014年7月4日に東北学院大学震災研究会が開かれ、本研究所の岡田憲夫所長が上記の題目で話題提供を行った。話しの骨子・要点は以下のとおりであった。

- ① 2011.3.11が問いかける警告を地域復興に活かすにはどうしたらよいか。
- ② 地域崩壊の危機は、「過疎化という社会（地域環境）災害」と「自然災害」の相乗的なものであるという認識が不可欠であること。
- ③ 過疎対策を地域復興として捉えることが必要であること。
- ④ 地域復興を「顔が見えて、風景の共有できる小さな地域」にスケールダウンして糸口を見つけていく発想転換が望まれること。
- ⑤ そのためには、身の丈に応じた小さな事起こしを実際に行い、

日本の災害ガバナンスにおける逆イメージ 韓国における災害研究の現状及び復興-制度の選択



金暎根
(韓国高麗大学日本研究センター HK 教授)

東日本大震災後の日本の経験を韓国への教訓として捉えようとする報告である。まず、震災後の日本の状況を概観し、韓国における震災学／災害学／災難学の誕生について述べ、さらに復興に対する学問の役割を提示する。震災発生後、被災地は想像を絶する変化に見舞われたが、人々の思想や価値観や社会構造、経済構造や経済政策にも大きな変化が迫られた。もちろん、原因は震災に限られるものではなく、円高や海外の政治経済情勢などの影響も大きい。それゆえグローバルな世界的変動を視野に入れつつ、震災後の日本の政治経済構造や経済政策の変化を分析することは重要である。しかし、その一方で、従来の復興イメージから脱却し、逆イメージからの分析を試みることも必要であろう。韓国では政府による上からの復興プロセスが通常想定されている復興イメージであり、それに対して、現場中心の復興プロセスをここでは逆イメージと呼ぶ。日本の場合、被災地の実態（現状と選好）が日本政府の災害ガバナンスに影響を及ぼしている点が、韓国に比較して進んでおり、この点を検証して理論化することが韓国の災害研究にとって重要な課題である。また、逆イメージとしての日本の災害ガバナンスにおける効率的／非効率的な側面を明確にすることも重要な課題である。それはより優れたガバナンスを構築していくうえで不可欠の課題であろう。（報告：山泰幸）

息長い取り組みにより主体的に生きるまちづくりをする社会実験を実践しようではないか。

- ⑥ これまで岡田が30年にわたって関わってきた、鳥取県智頭町の事起こしの事例を参考にしてほしい。
 - ⑦ 小さな「地域復興」とは、「あのとき」に戻るのではなく、「あのときにも人々が主体的に選択・行動し、目指していたビジョン」を参照しつつ、必要に応じて「これから」を見直して適応的に進めていくことであると心得るのがよい。
- 話題提供の後、フロアからいくつかの質問やコメントが出された。実際のフィールドにおける研究者の立ち位置の問題、スケールダウンして地域を捉え、その変革を目指すアプローチの有効性と限界について、被災地や他の過疎地域への適用の可能性や一般化の範囲について、などである。これらの事項をめぐって熱心な質疑応答と討論の場となった。（報告：岡田憲夫）

〈地域〉の内部で〈トランス地域〉を試考する 地域災害思想学の意味



全成坤
(韓国高麗大学日本研究センター HK 研究教授)

災害と地域、あるいは災害と場所の問題を〈トランス〉という語彙をキーワードに思想的に読み解こうとする報告である。災害によって日常が破壊されることによって、人は初めて、日常が、建築やインフラや社会（共同体）によって、人工的に創られたものであったことに気づかされる。2014年1月に報告者が現地調査を実施した福島県の富岡町の例を取り上げる。住民たちは、福島第一原発事故のため、避難所へ移動させられ、さらに仮設住宅へ移動を余儀なくされている。一般の住民から仮設住宅の住民へ。そこで今まで考えもしなかった、社会的な弱者であったことに気づくのである。これは富岡町だけの問題ではなく、国家が政策的に行う復興プロセスに関わるものである以上、特殊な問題ではない。誰もが潜在的には弱者であり、災害によって誰もが弱者になりうるのである。もちろん、仮設住宅は、社会的な対応策・支援策であることには違いない。しかし、故郷を奪われ仮設住宅に暮らす住民の存在は、災害に対する社会的対応自体が、社会的弱者を生み出しているようにも見える。それは「社会化された災害」である。人間復興とは、国家が政策的に必要とする人間を復興することではない。人間という立脚点から、科学・近代・建築・社会・国家への眼差しがもっている思想的な欠陥を再考しなくてはならない。（報告：山泰幸）

阪神・淡路大震災20年 災害復興制度研究所10年記念フォーラム

「震災バネ」を通しテーマに1月10日から12日の3日間開催

阪神・淡路大震災20年と災害復興制度研究所10年を記念する2015年1月の復興・減災フォーラムは「震災バネ」が通しテーマです。期間は例年より1日多い1月10日から12日までの3日間。初日は「震災バネがつなぐ復興への想い」と題して、全国被災地交流集会・円卓会議を開きます。2014年度秋学期で開講している災害復興学「震災バネがつくった私の人生」を受けてのワークショップで阪神・淡路大震災から東日本大震災までの被災地から30人を超えるゲストを招きます。11日は、いつものシンポジウムに変えてリレートーク「届け 震災バネが伝える復興への想い～KOBEからTOHOKUへ」を企画。タレント妹尾和夫さんとフリーアナウンサー魚住由紀さんの司会で2組4人のゲストを迎えます。最終日の12日は日本災害復興学会や震災がつなぐ全国ネットワークなどで構成する二つの実行委員会主催でワークショップ「災害ボランティア20年——これからのボランティアと対話の力」と公開セミナー「阪神・淡路大震災の教訓からみた東日本大震災」を同時開催します。また、11日に日本災害復興学会の理事会、12日に総会もあります。

1日目 1/10 全国被災地交流集会・円卓会議 震災バネがつなぐ復興への想い

第1部 人に寄り添う 13:00-14:40

- 村井雅清 (被災地NGO協働センター 代表、CODE 海外災害援助市民センター 理事)
- 能島裕介 (特定非営利活動法人ブレンヒューマニティ 理事長)
- 中笠翔太 (震災遺児、神戸市外国語大学4年)
- 東北レインボーハウススタッフ (調整中)
- 保坂隼人 (東北学院大学災害ボランティアステーション 前学生代表)
- 西山祐子 (一般社団法人みんなの手 代表理事)
- 西崎伸子 (福島大学行政政策学類 准教授)
- 古部真由美 (東日本大震災県外避難者西日本連絡会 まるっと西日本 代表)
- 田並尚恵 (川崎医療福祉大学 准教授)
- 高橋征仁 (山口大学 人文学部 人文社会学科 教授)

第2部 地域に寄り添う 14:50-17:00

- 中村順子 (認定NPO法人 コミュニティ・サポートセンター神戸 理事長)
- 野崎隆一 (建築事務所代表、NPO法人神戸まちづくり研究所 事務局長)
- 山下弘彦 (日野ボランティアネットワーク コーディネーター)
- 稲垣文彦 (公益社団法人中越防災安全推進機構 復興デザインセンター長)
- 上村靖司 (長岡科学技術大学 教授)
- 宮下加奈 (ネットワーク三宅島 代表)
- 伊藤廣司 (山菜茶屋ざらぼう、元花山震災復興の会「がんばっぺ」事務局長／宮城県栗原市)
- 義元みか (天栄むすび屋／福島県岩瀬郡天栄村)
- 藤田浩志 (ふじた農園 安子島米米生産倶楽部／福島県郡山市)
- 染谷亜紗子 (花泉酒造合名会社／福島県南会津郡)
- 曾田めぐみ (女子の暮らしの研究所／福島県郡山市)
- 北村育美 (福島大学 ふくしま未来学(COC)推進室事務局 地域コーディネーター、中越からの応援)
- 宮本 匠 (京都大学防災研究所 特定研究員)

第3部 震災バネと災害列島 17:05-17:30

- 宮崎汐里 (中央大学被災地支援学生団体ネットワーク)
- 渡邊恵理香 (動画配信受講生／岩手県盛岡市)
- 土方正志 (出版社「荒蝦夷」代表取締役／宮城県仙台市)
- 矢野 奨 (河北新報社 報道部副部長)
- 室崎益輝 (公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構 副理事長兼研究部長)
- 岡田憲夫 (関西学院大学災害復興制度研究所 所長)

- 司会
- 山中茂樹 (関西学院大学災害復興制度研究所 主任研究員／教授)
 - 松田曜子 (関西学院大学災害復興制度研究所 准教授)

2日目 1/11 リレートーク 届け 震災バネが伝える復興への想い ～KOBEからTOHOKUへ

案内人は、大阪MBSラジオ「ネットワーク1・17」のゴールデンコンビだった妹尾和夫さんと魚住由紀さん

復興・減災フォーラム2日目の11日は、リレートーク「届け 震災バネが伝える復興への想い～KOBEからTOHOKUへ」と題して、二組4人のゲストを迎えます。案内人は、大阪MBSラジオの長寿番組「ネットワーク1・17」で、長らく司会を務めたタレントでラジオパーソナリティの妹尾和夫さんとフリーアナウンサーの魚住由紀さん。開会は午後1時。冒頭、災害復興制度研究所の山中茂樹が、2014年度の秋学期から阪神・淡路大震災20年企画として開講した災害復興学「震災バネがつくった私の人生」を受け、解題する。リレートークは、午後2時から各組約70分にわたって、ゲスト4人が震災にどう立ち向かったのかを聴く。ゲストとプロフィールは次の通り。

▶第1組 14:10-15:20



加藤りつこさん
広島市安佐北区在住。広島と福島を結ぶ会会長。阪神・淡路大震災で神戸大学法学部2年生だった一人息子(当時21)を失う。生前、母親への感謝の思いをつづった手紙「親愛なる母上様」が作曲家によって曲となり、2008年以降、作曲家とともに全国で演奏会を開いてきた。東日本大震災が起きてからは福島県いわき市と交流を続け、とりわけ福島県立海星高校の応援に力を入れている。広島土砂災害被災地の支援も。



中笠翔太さん
神戸市東灘区在住。神戸市外国語大学外国語学部国際関係学部4年。阪神・淡路大震災で母親を失い、祖母に育てられた。小学1年の時にできた震災遺児の心のケア施設「レインボーハウス」に通って育った。2008年5月の四川大地震や2010年1月のハイチ大地震で、親を亡くした子どもたちを励ますため、あしなが育英会の使節団として被災地を訪問。現在は東北の被災地を訪ね、子どもたちの遊び相手になっている。

▶第2組 15:30-16:50



西山祐子さん
福島市出身。仙台・東京で英語講師、通訳等の仕事に従事。出産を機に福島市に戻り子育て中、被災。東日本大震災が起きてからは東京を経て2011年6月に京都へ3歳の娘と父母と避難する。2011年12月に 県外避難者の支援団体「避難者と支援者を結ぶ京都ネットワーク みんなの手」を設立。2013年5月には避難者の就労支援も兼ねて避難者と地域を結ぶコミュニティカフェ「みんなのカフェ」をオープンした。



西崎伸子さん
福島市在住。福島大学行政政策学類准教授。専門はアフリカ地域研究・環境社会学。夫と小学校4年の娘が兵庫県の丹波篠山に避難中。東日本大震災後は、福島乳幼児妊産婦ニーズ対応プロジェクト・福島の子ども保養プロジェクトなどで未就学児童を育てる家族の避難や保養の支援をおこなう。アフリカ研究では、動物保護区の開設に伴い居住地を追われた現地人の抵抗運動と福島原発避難とを重ね合わせたの研究も検討中。

	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
1日目 1月10日(日)					全国被災地交流集会・円卓会議 「震災バネがつなぐ復興への想い」 13:00-17:30 於：関西学院会館レセプションホール				
2日目 1月11日(月)		日本災害復興学会 理事会 10:30-12:00 関西学院大学大学院棟会議室1 関西学院大学東京丸の内キャンパス			リレートーク 「届け 震災バネが伝える復興への想い ～KOBEからTOHOKUへ」 13:00-17:00 於：関西学院会館レセプションホール				
3日目 1月12日(月)祝	日本災害復興学会 総会 11:30-12:30 関西学院大学F号館102号室			ワークショップ 災害ボランティア20年ワークショップ—これからのボランティアと対話の力 13:00-17:00 於：関西学院会館レセプションホール					
	公開セミナー・研究報告会「阪神・淡路大震災の教訓からみた東日本大震災」10:00～17:00 関西学院大学F号館104号室								

3日目 1/12 ワークショップ・公開セミナー研究報告

最終日は、日本災害復興学会や震災がつなぐ全国ネットワークなどと組織する実行委員会の主催で「災害ボランティア20年ワークショップ—これからのボランティアと対話の力」、公開セミナー研究報告会「阪神・淡路大震災の教訓からみた東日本大震災」を開催する。

ワークショップ 13:00-17:00

災害ボランティア20年ワークショップ これからのボランティアと対話の力

- 〈主催〉「災害ボランティア20年ワークショップ実行委員会」(日本災害復興学会、震災がつなぐ全国ネットワーク、関西学院大学災害復興制度研究所の3者で構成)
- 〈会場〉関西学院会館レセプションホール
- 〈内容〉平田オリザ氏(劇団青年団主宰、東京藝術大学アートイノベーションセンター特任教授)を講師に迎え、災害ボランティア関係者約30人参加のワークショップ、基調講演、パネルディスカッション「“ボランティア”と“被災者”の対話の力」を行い、神戸世代、中越世代、東日本世代、そして将来の被災地を担うボランティアの役割を考える。

公開セミナー研究報告会 10:00-17:00

阪神・淡路大震災の教訓からみた東日本大震災

- 〈主催〉「東日本大震災検証プロジェクト委員会」(日本災害復興学会復興法制度研究会、関学復興研法制度研究会で構成)
- 〈会場〉関西学院大学F号館104号室
- 〈内容〉東日本大震災の初期対応を中心に会員の青田良介、石川永子、磯辺康子、小口幸人、坂本真由美、関谷直也、田並尚恵、鳥井静夫のみなさん(50音順)が「避難所」「広域避難」「みなし仮設」などのテーマで研究報告する。一般公開。

震災バネ

阪神・淡路大震災で生まれた「震災バネ」という言葉がある。「ポスト・トラウマティック・グロース」(心的外傷後の成長：PTG = Posttraumatic Growth)「逆境の効用」という用語も東日本大震災のあと注目され始めた。いずれも、被災という辛い体験でくじけるのではなく、逆にこの逆境を糧にして人として成長し、新しい災害文化を形成していくことを意味する。震災バネ、もしくは復興バネという造語は、1995年の阪神・淡路大震災で生まれ、2004年の新潟県中越地震で市民権を得た。一方、PTGという概念は、米・ノースカロライナ大学シャーロット校心理学部教授のリチャード・テデスキ博士らが中心となって研究されてきた、いわゆるポジティブ心理学の用語だが、東日本大震災以降、注目されるようになった。また、「逆境の効用」という言葉を、米国の心理学者ジョナサン・ハイトが著書「しあわせ仮説」の中で使っている。ともすれば「負のスパイラル」のみに注目がいく被災体験をポジティブに捉え、前向きに生きる人たちにスポットをあてようとの考え方が、

第5回国際総合防災学会 (IDRiM2014) が開催されました

関西学院大学災害復興制度研究所研究員
・特任准教授

松田 曜子

今回で5回目となる国際総合防災学会 (International Society for Integrated Disaster Risk Management, IDRiM) の2014年年次大会が、10月30日から11月1日まで、カナダ・オンタリオ州ロンドン市のウェスタン大学で開催された。主催国のカナダをはじめ、米国、日本、中国、ヨーロッパ、アフリカ各国等から130件ほどの研究発表が集まり、この学会独特のアットホームで学際的な雰囲気の中、密度の濃い議論が交わされた。

今年の大会テーマには「Building Disaster Resilient Communities」が掲げられた。この全体テーマを受けてか、冒頭の基調講演から若手研究者セッションにいたるまで、レジリエンスについての発表が多く見受けられた。

この学会の会長でもある岡田憲夫当研究所所長は、複数のセッションで進行役を務めたほか、自身の研究として「四面会議システムを利用した減災のための小さな事起こし」について発表を行った。

松田曜子研究員は、海外で活躍する日本人研究者や国内の実務者と共に、災害時の人道支援に関する合同セッションを企画・開催した。米国NVOAD (米国災害ボランティア組織) への調査を元に、米国にあって日本にないネットワーク組織の特徴を草の根志向、高い遵法意識、脆弱な市民活動力の3点から説明を試みた。

また、都合により出席できなかった山中茂樹主任研究員に代わって共同発表者として松田研究員が行った「災害後の住宅再建と被災者生活再建支援法の生い立ち」の発表に対しては、地震保険と支援金の重複のルールについて質問を受けた。これまで、この国際学会で日本の法制度に触れる研究は限られていたため、情報量に富む発表という評価を頂いた。支援法に限らず、東日本大震災や福島原発事故の課題については、国際的には整理されていない部分も多い。当研究所の取り組みに対する激励の声も聞くことができた。

さて、世界各国から多様な専門分野 (工学、経済学、社会心理学、社会学、政策科学等) の研究者が集うこの学会において、一般的な日本人研究者が他の参加者と交流を図るには、言葉の壁に加え専門分野の壁という二重の壁を超えねばならず、これは容易なことではない。会議中、全体パネルディスカッションに登壇した渥美公秀先生 (大阪大学大学院) は、今年の大会テーマ「Resilient communities」について言及し、「強い (Strong) ばかりがResilientではない。私たちが支援活動から得られたのは弱さ (Weak) が互いの連帯という強さを生むということだ」といった趣旨の発言をされた。我々の感覚では非常に馴染みやすいこうした考え方も、Weak/Strongという単純な強弱の表現では、欧米出身の研究者には理解されていないようだった。英語に堪能な渥美先生にあってこのニュア

スを伝えるのに苦労されていたのだから、一般の研究者の壁の高さは推して知るべしである。

しかし、だからといって、会期中発表以外の時間をただ座って過ごすのはもったいない。石井淳蔵氏の新刊 (『寄り添う力』碩学舎、2014年) に「学会を構成する基本要素は、人ではなく、人と人とのあいだで交わされるコミュニケーション」であり「コミュニケーションの連鎖がない学会は機能不全に陥る」とあった。IDRiM学会は特に、発表以外のコミュニケーションの機会に本質的な意義を備えていると言ってもよいだろう。

ところで、ボランティアの現場では少し前に「受援力」という新しい日本語が生まれた。イメージを共有しづらい「レジリエンス」だが、受援力の考え方になぞらえることができるのではないかと、今年の学会テーマは「災害を受け止められるコミュニティの構築」と理解してはどうかと思いついたのが、学会参加者とのコミュニケーションの個人的成果だった。

今年は日本災害復興学会で馴染み深い会員の発表も何件か見られ、IDRiMの輪が広がっていることを感じた。なお、2015年の年次大会は10月末にインドのニューデリーで開催される。アットホームな学会なので、自身でセッションを持ったり、学生であれば若手研究者セッションで発表したり、様々な方法での参加が可能だ。来年は日本からより多くの参加を期待したい。

(報告: 松田曜子)

国際総合防災学会 (IDRiM) ウェブサイト: <http://idrim.org/>



▲全体会議の様子



◀その名もテムズ川が流れるロンドン市内、オンタリオ州のロンドンにはキリスト教時代に母国にちなんで名前がつけられた

観 感 学 楽

被災地を**観**る、
被災地の痛みを**感**じる、
そして、
被災地から**学**ぶ、
被災地の人々と**楽**しむ。

かんかんがくがく

被災地ネット

震災 20 年を取材して / 森本尚樹

阪神・淡路大震災 20 年

——時間の壁と向き合って / 矢倉崇史

震災 20 年を取材して

神戸新聞報道部記者
森本尚樹

昨年秋から「災害特報班」の一員として、阪神・淡路大震災 20 年報道の取材を続けている。神戸新聞はいま、埋もれつつある震災の教訓を掘り起し、再提起するキャンペーン報道「震災 20 年次代へ」に取り組んでいる。

取材班の記者は皆、震災後の入社だ。当時、ボランティアで被災地入りしたという記者や、あの揺れを子どものころの記憶として持つ記者はいるが、私は東京都内の大学生で、(たまたま起きていて) 震度 1 の揺れを覚えているに過ぎない。

三田市に実家があったが、被害はなかった。その後、ただテレビを見て過ごした。被災地を見たい気もしたが、不謹慎だと感じてやめた。ボランティアとして被災地を目指す若者の動きが紹介され、何となく引け目を感じた。

そんな中、象徴的に報道されていたのが、神戸市長田区の菅原商店街だった。焼け野原に残ったアーケードの映像は、被災地と関わりを持つとしなかつた悔恨の記憶としてあり続けた。2年後、私は神戸新聞の記者となった。

折に触れて震災報道に関わってきたが、真正面から取り組むことになった今回、菅原商店街に足を向けた。情けない話だが、今回の取材まで、私は菅原商店街の場所をきちんと知らなかった。現地で驚いた。そこはJR神戸線から見える。私はかつて、それと気づかず、通勤電車の窓から毎日、変貌した菅原商店街を見ていたのだ。

地区は震災復興区画整理事業で幅6メートルの道路が整備され、アーケード再建どころか、商店街自体がなくなっている。名残のように残った店々を訪ねたが、少なからぬ店主が鬼籍に入ってい

た。その人口は震災前の半分を割っていた。
ある住民は自嘲気味に「住宅展示場みたいでしょ」とつぶやいた。小ざれいだが、人の息遣いが聞こえない。行政は「安全なまちになった」「人口密度が適正化された」と強調する。確かにそうかもしれないが、やりきれないものがある。
復興の課題はこれからも見えてくる。目をそらすわけにはいかない。



◀焼け焦げたアーケードが残った菅原商店街 (1995年1月18日) © 神戸新聞社

▲区画整理事業の完了から11年が過ぎた旧菅原商店街 (2014年6月12日) © 神戸新聞社

れた行政マンなど。亡くなられた方も少なくなく、また転居を繰り返されているケースも多く、連絡がつくまでに苦労することも多い。
しかし震災を体験された当事者ならではの言葉や本音は我々取材者にとって非常に貴重である。時には、思い出すのも辛いという思い出も聞かざるをえないこともあり、申し訳なく思うこともある。
実は、当事者から話を伺う度に、取材者としていつも心のなかで葛藤を覚えている。自分自身が震災を体感していないのだ。当時、奈良県の片田舎に暮らす高校3年生で、震災が起きた時は大学受験のまっただ中だった。正直なところ、震災のことより直前に終わった大学入試センター試験の結果のほうが気になっていた。確かに揺れは経験したが、震度4。周囲に被害は無く、神戸の街を訪ねることもしなかった。

取材では家族を亡くされた方にも話を伺っている。亡くなった子どもの思い出を語るときには涙を流される方も多い。そんな話を震災を知らない自分が聞いていいのかわからない。不安になることもある。

しかし翻ってみると、いまNHKで取材を行う記者・ディレクターは私よりずっと若い者ばかり。震災当時、幼稚園児だったという新人もいる。彼らにとっては震災と言えば「東日本大震災」を真っ先に思い起こすほど。20年前からは年月が経っているのだなと感じる。

震災20年、25年、30年……と年月を追うごとに、取材する側もドンドン知らない世代になっていってしまう。震災の報道は将来にわたって続けていかなければならない。これからは、被災された方の貴重な言葉や思いと共に、私自身が後輩の取材者に震災20年の取材で感じた自身の体験や志も伝えていかなければいけないと思う。

阪神・淡路大震災 20 年 ——時間の壁と向き合って

NHK 神戸放送局 放送部ディレクター
矢倉 崇史

来年1月17日で阪神・淡路大震災から20年を迎える。いま神戸の街を歩いても、震災の傷跡や記憶を直接、目にすることはほとんどない。そこでNHK神戸放送局と大阪放送局では、20年に向けて、改めて震災とは何だったのか、復興とは何だったのか、行政担当者や被災された方、ボランティア団体など当事者に話を伺っている。

NHKの取材に継続的にご協力いただいている方はもちろん、震災直後に一度だけカメラの前で証言された方、退職さ



日本を救う「青島化現象」?

「決意」を告げられたとき、年甲斐もなく動転した、と正直に申し上げましょう。「東京社会部」というゴールは目前なのに、会社を辞める? それも転職先は南会津の酒造会社? 思わぬカミングアウトの主は、日ごろ取材でお世話になっていたNHK大阪放送局の女性記者です。28歳の若さ。初任地の福島で東日本大震災に遭遇、原発事故に苦しむ人々を目の当たりにし、観察者としての記者に限界を感じたようです。酒造会社の広報として被災地の食の復興にかかわりたいとのことでした。

「あたら才能を埋もれさせることにならないか」。新潟県長岡市の友人から「南会津は、会津でも秘境ですよ」との感想を聞いてからは説得にも熱が入りました。酒造会社には申し訳なかったのですが、「分別ください」と思われるような言葉を連ね、説得を試みましたが、当然、決意が揺らぐはずありません。8月末、勇躍、会津に旅立っていきました。

私たちの若い頃は、「末は博士か大臣か」とまではいわなくとも、多くの若者は「てっぺん」めざして、しゃにむに働きました。しかし、今は様子が違うようです。かつて「踊る大捜査線」という人気テレビドラマがありました。警察庁キャリアの室井慎次が、現場一筋の巡査部長・青島俊作との「約束」により警察の改革を進めていく物語です。私たちは体制側にせよ、反体制側にせよ、ある種、室井慎次だったのです。ところが、今の若者は室井さんが青島になろうとしているのです。私は、この現象を「若者の青島化」と呼ぶことにしました。

私の独断ですが、青島化現象の原点は1995年の阪神・淡路大震災にあるように思います。「ボランティア元年」といわれ、多くの若者が立身出世以外に生きる価値を探し始めました。そして2004年の新潟県中越地震。「よそ者、若者、バカ者」と呼ばれる社会現象が起きました。「よそ者」が被災地に入り、高度経済成長の中で置き去りにされてきた中山間地の良さを再発見しました。ボランティアの「若者」たちは、過疎地のお年寄りたちにお年寄りの持っている技術と知恵が「たいしたものだ」ということを気付かせました。「よそ者」である「若者」は、中山間地に住みついて、「バカ者」と呼ばれようと一心不乱、得にもならないことに取り組み、地域の人々に再起を促しました。この青島化現象が、新潟県の復興支援員制度に結びつき、総務省の地域起こし協力隊や東日本大震災での復興応援隊などに発展していったといえるでしょう。

内閣府が今年8月に発表した「農山漁村に関する世論調査」によりますと、都市部の20歳代の約4割が田舎への定住を希望したといえます。また、地域起こし協力隊に従事した若者の約6割が任務終了後もその地域に定住しているとのこと。いわて復興応援隊に従事している若者たちの前職は、システムエンジニア、コンサルタント、在外公館職員、新聞記者、銀行員、翻訳家など、都会や海外で活躍していた人たちです。決して行き場を失った「自分探し」の人たちではないのです。私たち団塊の世代は、社会の矛盾に「まじり決して」挑もうとしました。しかし、今の若者はしなやかに日本社会の矛盾のフタを開け、関わろうとしているようにも思えます。震災バネをテーマにした1月の全国被災地交流集会では青島化現象の若者たちも、ともに円卓を囲みます。官製の「地方創生」ではない、手作りの「被災地再生」を考える場にできればと願っています。(樹)

日本災害復興学会 会員募集中!!

ご入会ご希望の方は入会申込書に所定の事項をご記入のうえ、下記の学会事務局まで郵送にてお申し込みください。入会申込書は、日本災害復興学会のホームページ(<http://www.f-gakkai.net/>)よりダウンロードしていただくか、下記までご連絡いただき、お取り寄せください。

また、後日事務局よりお送りする専用振り込み用紙にて必要金額をご入金ください。

(1) 申込書送付先

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
関西学院大学災害復興制度研究所内
日本災害復興学会事務局
TEL: 0798-54-6996

(2) 入会金 3,000円

(3) 学会費(年額)

1) 正会員	7,000円	3) 購読会員	6,000円
2) 学生会員	3,000円	4) 賛助会員	一口: 50,000円

西宮上ヶ原キャンパス

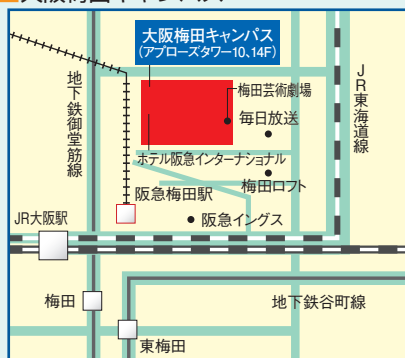
西宮聖和キャンパス



神戸三田キャンパス



大阪梅田キャンパス



阪急梅田駅茶屋町口から北へ徒歩5分

〒530-0013 大阪市北区茶屋町 19-19
アプローズタワー 14階
TEL: 06-6485-5611

関西学院東京丸の内キャンパス



JR東京駅八重洲北口から徒歩1分

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12
サビアタワー 10階
TEL: 03-5222-5678



関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY
災害復興制度研究所

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号
TEL: 0798-54-6996 FAX: 0798-54-6997
<http://www.kwansei.ac.jp>
URL: <http://fukkou.net/> E-mail: kgu_fukko2005@fukkou.net